
異世界フラグがたちました

ちょむ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界フラグがたちました

【著者名】

ちよむ

【あらすじ】

わけもわからず「ココドハドコドスカ?

美しき魔女様に拾われたはいいものの、もう帰れないってどゆこと?

魔女様の「コネでなつた宫廷医術魔法師だけど・・・
なんだか恐ろしい狼に懐かれて（もふもふは正義）
やたら美形な魔術師には迫られて・・・

モウヤダコワイ

何だかんだ言つて天然な光ちゃん。

趣味は食べる」と、な光ちゃんが前向きに頑張っちゃう異世界なお話。

パンチフラグがたちました（前書き）

初心者マークを身体中に貼り付けて書きたいへんのです。

駄文すいませんが、気楽に読んでくださいませー。

ピンチフラグがたちました

空を見上げた。

うん。凄く綺麗な青空。
ピクニック日和ですね?
わかります。

ぐるりと辺りを見回せば。

「ココハドコデスカ」

やたら広い草原にポツリ。

あの……すいません。

私、久保井 光（17歳）

理解不能な状況におちいりました。

まずは状況分析ですね？

ちゅうと冷静ぶつてみますか？

- ・私は今、片手にシャーペンを握っている。
- ・高校の制服を着ている。

・ついでに今まで数学の授業でウトウトしていた。

・ロボハンドデスカ

結論。

これは夢ですね？

納得。

……いや。

ちゅうと待て。

おこおいおいなんだこのコアル。

夢つてこんなに感覚あつたっけ？

嗚呼この吹き抜ける心地よい風！
そよそよと風ぐ草達！

恐る恐る頬つぺたを…

「痛いじゃないかコノヤロー！」

久保井 光 （17歳）

人生にあるかないかのピンチフラグがたちました。

え。ナーフルコロイ。（前書き）

見てくださつてありがとうございます。

大丈夫かなこの人的な文章がありますが、すいません…

ま、前向きに頑張るんだからネッ？

え。ナーフルコロイ。

頬つぺたが痛い…

夢じやないんですか！？

現実！？

いやでも私ついさっきまで数学してたよ？

こんなそよそよしたところにいなかつたよ？

アレか。

瞬間移動的な能力が開花したのか。

え？

数学でウトウトしてたタイミングで！？

取り敢えず、座ろうか。

うん。

そうしようか。

落ち着いて、座つてみましょうか？

「ふう……」

「なにここの子。凄く落ち着いてるわ！…大丈夫なの？」

「…？」

田の前で巨乳が

揺れた。

* * *

田の前に立つのは、ないすばでい、なお姉さん。

「だ…誰？」

「あり。大丈夫そうね。私はアール。貴女を呼び出したの。」

フフン、と自慢気に桃色の髪を揺らしたアールさん。

フフン、じゃねーし。

「何デデスカ？ココハドコデスカ？ナンデワタシハココニイルンデスカ？」

「何でカタカナなのかしら？まあいいわ。いろいろ説明するから私の家に行きましょうか。はい、転移。」

アールさんがギュッと私の手を握ると、

ぐいん、と体が引つ張られる感覚と共に、視界が変わった。

六
六
六

呆然とする私の手を引いて、アールさんは森の中の可愛らしい家に招き入れた。

る私。 気付けば、良い香りのする紅茶を持たされて椅子にちょこん、と座

ゆらゆらと立ち上る湯気を見つめ、力オスな頭を整理しようと試み

た。

えーとまづ…

今のはナニー?

あのぐいんつてなるやつはなんだつたんだ!?

頭を混乱させる私を、アールさんはふふ、と笑った。

何故笑うんだ!

バカにしちゃいけないんだぞ!

こつちは必死なんだぞ!

「貴女を喚んで良かつたわ。可愛らしいし、行動がおもしろいし。
…名前は何て言うの?」

アールさんが美人の微笑みをきました。

「久保井 光と申しますけど…説明、してくれますか?」

アールさんが、ニヤリと笑つた気がした。

「此処は、光が住んでいた世界ではないわ。つまり……異世界、よ。」

。。。

ナーフンハイ。

「ああ、元の世界にはもう戻れないけど私が面倒みてあげるから心配しないでね。」

。。。

ナーフンもハヒハイ。

「今日から光は私の弟子よ……。」

アールさんが高らかに宣言した。

え。ナーフルコロイ。（後書き）

あう……この後どうしようかな…

頑張るハラグをたてました。（前書き）

お餅つて美味しいですよね～？

関係N E E E E E !

頑張るツラグをたてました。

「いやいや全然分かりませんから。帰れないってどういふことですか?もしかして私、巷で噂の異世界トリップしちゃいました?」

自信満々なアールさんに言ひ。

「憧れの異世界トリップ、ヨカッタネ」

アールさんはウインクをしてブイサインをする。

ペッソとブイサインをはたき落として訴える。

「何勝手なことしてくれてるんですか!
あなた魔術師ですかそうですか!…じゃあ私を還してくださいいい
いい!…！」

ぐらぐらとアールさんの肩を揺ゆく。

まだ17歳なのに…!
これからなのに…!

大学にも行ってないのに…!

「ビーしててくれるんですかああああ…！」

アールさんは哀しそうに頭を伏せた。

「私は、ずっと一人だったのよ。此処で、独りぼっちだったの。誰か、一緒にいてくれる人が欲しかった。巻き込んで、ごめんなさいね…」

その顔が、凄く切なくて。

ハツと息を呑んだ。

「…アールさん！私は、私で良ければ一緒にいますよー。」

思わず、言つていた。

嗚呼、私のスカポンタンめ…

「ホント！？嬉しいわあ～」

パツと顔を上げたアールさん。

……ダマサレタ。

* * *

アールさんは、魔術師だった。

ハリー・オッター的なWWWWW

そして、帰れない私は、アールさんの弟子となつた。

べつ…別に魔術に興味があつたわけじゃないんだからね！

何か帰る手口が見つかりやすいでしょ！

この世界の事も、少し教わつた。

王様がいるらしいWWWWW

魔術が普通にあるらしいWWWWW

IJの国の名前はベイ国。

歐米か！ってアールさんにツッコんだら怪訝な顔された。

なんか悲しいな。

まあ

その他もうものにとは、後から教えてくれるらしいです。

「質問は遠慮なくどうぞー！」

おお「へ、アールさん凄く頼もしいぞ！」

「スリーサイズはー（あべしつ）」

叩かれた。

お父さん、お母さん、弟よ

帰れないけど諦めないで帰る方法見つけますから！

それまで待つてね！

いっかの世界では
楽しくやれそうです。

人生はポジティブにね！

光

PS、マリモの真理子、枯らさないでくれると嬉しいです。

手紙は届かないと思うけど…

書くだけ書いて、紙飛行機にして飛ばしました WWWWW

久保井 光 17歳

異世界で頑張ってみます！！！

異世界ライフ、タノシイ三（前編）

いややつなんかどうでもなれーと
こいつらとじゅ。

異世界ライフ、タノシイヨ

「光の部屋は此処よ。好きに使いなさい。」

アールさんが部屋をくれました。

木の温かな机やオレンジのカーペット。

ふかふかとした明るい緑のベッドは、ダイブしたくなつそう。

「いいですね…温かで」

アールさんは、

「そりゃそりゃ…私が光のために用意したんだもの…」

…アールさん

「ヤ顔しないでくだれー。」

えーと

怒つたらいいのか喜んだらいいのか…

用意してくれたのは凄く嬉しいよー。

いや、嬉しいんだけどね。

いきなり異世界トリップとかされて、もう帰れないとか言われて貴女の部屋は此処よ とか言われて何ですかソレ。

私、元の世界に家族居ました。
友達もいました。

彼氏は欲しかったです。 願望

それなりに女子高生してました。 でもいきなりですか！？
部屋まで用意してあるつべどんだけですか！？

でもまあ、用意してもらつた可愛い部屋は嬉しいです。

野宿とかやだからね！

「わ、わーい」

いろいろ考えすぎて、めいちない喜びになつた私をアールさんは笑つた。

「ふふふ…やつぱり光で良かつたわ。あ、その格好じゃマズいでしょ。」

着替えなさい。」

サツヒアールさんが手を振れば、

「おおおー。」

黒のワンピースがヒラヒラと空中を舞つた。

「…これは、魔女の宅便の…！」

感激してワンピースを掴む私にアールさんが言ひ。

「まあ、今はこんな地味なのしかないけど…落ち着いたら私が買つてあげるわ。我慢して？」

チラリとアールさんを見る。

スリットの入ったドレスから綺麗な脚が…

え。

際どくないですか？

太腿太腿！

「光は色白だしスタイルも良いから…着せ替え甲斐がありそうねー！」

アールさん、私に何を着せる気ですか？

私、ソンナノキマセンヨ！

地味万歳！

アールさんが笑いながら部屋を出たあと、ぐるりと見回す。

ほつこりとあつたかくなるような家具達は、私の趣味ビストライク。

「はあ…」

つここの前までテストでひーこらして、必死に眠氣と戦っていた私。

いきなりですか。

まあ、魔術とか？

気になるとか、使いたいとか？

思ひつけや思つんですけどね。

ちゅうひとつですよ？

ほんのちゅうひとつですかから。

何もやめじこーとほあつませんか？

でも、ついでにけませんよ……

「はあ……」

もう一つため息を吐いて、制服を脱いだ。

* * *

月日が流れていへのは早いもので。

異世界いっせかいの生活に大分慣れました！

最初の方こそ、夜中にひつそり田から海水とか流したりしたもの、
持ち前のポジティブさで慣れました。

んで、朝が早くなりました。

まだ太陽でないよ つて頃から生活が始まるのですヨカッタネ。

シャーツとカーテンを開けて、
ベッドを綺麗にして、

アールに買つてもらつたワンピースに着替える。

あ、大胆なやつは遠慮しました。アールが大喜びで持つてきた真つ赤なドレス？

胸が見えますつてば。

水を川から汲んできて顔を洗つてはあすつきりしたといひで。

外に生える植物達に水をぶっかけて、朝口が昇るのを見つめる。

しばらく黄金に染まる森を見て、

パタパタと家に戻つて朝食の支度に取り掛かる。

朝ごはんは

サラダを挟んだサンドイッチと

ベリージャムをのつけたヨーグルト。

あ

わけあって、お肉、食べられなくなりました。

テーブルの上に一人分セットして、真っ黒いロープを羽織つたら。

最後の難関へ！

10

十一

薄暗い部屋にそろそろと足を踏み入れる。

ベッドの上で丸くなっている敵を見据えながら一気にカーテンを引くッ！――

シャアアアツ

「師匠起きてください！朝ですよ！」

「むう…」

毛布を頭まで被った敵を揺さぶる。
アール

頬に一筋傷ができた。

そう。

私の毎日の日課。

命懸けで師匠アールを起こすこと。

死ぬよ？これ。

アールは不機嫌そうにパチンと指を鳴らす。

「えつ、ちよつ、待つ」

炎の球がこちらに向かってくる。

この日課は、寝起きの悪アールを起こすと共に、魔術の修行をする私の朝の練習の場もある。

アールが必死に教えてくれたお陰で魔術、使えますよ私！

わあいヤツター！

向かってくる火の球に集中して、必死に魔力の流れを感じとり、薄い膜のようなものを体に纏つた。
勢い良く火の球は膜にぶつかり、消滅する。

「ツ師匠一起あつへださごー。」

叫べば、チツと舌打ちして耳を塞ぐアール。

「いひなつたらセヒアレだ。

アレしかない。

最後の手段だ。

喉に手を当てて魔力を流し込む。

すう

「起きてください師匠――――――――――――――！」

拡声魔術で叫んだら。

「……うるさいわね！起きるわよ起きればいいんでしょ……。」

氣だるげにアールが身を起こした。

私は治癒魔術を使って頬の傷を治し、にっこり笑う。

「せこ、おせむじがこめす師匠。」

まるで使い魔のよつな私ですが、異世界ライフ、結構楽しいです。

異世界ライフ、タノシイヨ（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

最強だよもふもふ。正義だよもふもふ。（前書き）

更新不定期ですいませんです。

できるだけ頑張りますよー。

最強だよもふもふ。
正義だよもふもふ。

「早い」といひ、飯食べかねつてへださい師匠。

アールの着替えを手伝つて、
h s h sしたところで

アールのないすばでは素晴らしいと思います。

少々よろめきながら部屋を出る。

いざ、あれですか。

生物学的に分類されますから。

アーリのないすはでいを見て鼻血出したらなんかいろいろ終わりますから。

危なしてすだら

一足先に席についてサンドイッチを頬張る。

いやほー！最高！

食べ物=ナシモノ

ですか？

因みにアールは料理ができません。

：一人で何食べてたの？
つて聞きました。

ええ、聞きましたとも！

そしたら

「うんと…草…じゃなくてサラダとか、あとは職場に食堂があった
し」

草って言つた！？

今草って言つちゃつたよね！？

話を聞いた私の目から海水が出てきたので、外に生えてた野菜らしきものを使って、ポトフ作りました。

調味料塩しかありませんでした。
ナニソレコワイ。

ポトフを一口食べたアール、

目からじょっぱいポトフの汁を流しました。

それを見て凄く悲しくなつて
二人でポトフの汁を流しながらポトフ食べました。

嗚呼、思い出すだけで
目からポトフの汁が…

それから、食事は私担当れす！

(・・・) キリッ

今では仕事の帰りにアールが食材を調達しています。
アールの仕事は王宮魔術師ですか？

どうでもいいけど、帰りに深いスリットの入った大胆なドレス買つ
てくれるのヤメテホシイ。
いや、着ないから。私着ないから。

そういうえば、

どうして肉が食べられなくなつたのか。

それは…

「嘘ーおはよーーーー！パンの耳余つたからあげるねー！」

外に出て、私が声を上げれば。

『ヒカリチャンアリガトウ!』

『アリガトウ!』

ぴいちくぱあちくと集まつてくる鳥達。

そうなんです。

久保井 光。

17歳にして動物との意志疎通能力を開花させました。

それに気付いたのは、
異世界に来てすぐでした。

あれは、可愛いウサギ様が迷いこんで来たときのことです。

私がいつものように

鼻歌を歌いながら草木に水をぶっかけていると…

「おや?君は可愛いちゃんではないですか?迷子ですか?迷ふもふを堪能させてくれないかな?」

ピッコロンと白いウサギ様が
おこになりました。

私はもふもふを愛していますから、わきわきと手を動かしながら近付いたのです。

あの時の私の顔は狂喜じみていたと考えられます。

嗚呼、想像するだけでぞぞくつと…

飛びかかるうと、猫さながらに身構えた瞬間、

『 ハワイ。コヅチクルヨ』

「え」

周りをわざわざと見回して、

「誰？」

空耳だと思って、ウサギ様を見れば、耳はヘタリと垂れてガクブル

（（（（・。・。）））な状態。

そんな姿に萌えてにじつよりました。

ああん、たまらないイイイ！

『 ハワイ語、ハワイ語、ハッシュクル語。』

「 … 」

今度はせつせつと聞こえ。

えつと今のは誰かな

もしかしてウサギちゃんかな

「 そんなわけないよね！ 私ってばバカだなあ HAHANA 」

『 ハワイ語、ハラッテル語。』

「 つて！ お前かアアアアアアア ! ! ! 」

ウサギ様は脱兎の如く…
否、脱兎になりました。

ウサギ様すいません。

といつわけで、

次の日、鳥に話しかけたら、
鳥フィーバーになった。

あ、皆さん、鳥に話しかける場合注意を。

奴ら、バツサバツサくるからね。

羽で視界とかないから。

よろけるしかないからね。

しかも奴ら爪結構鋭いからね。

ちょ、待つ、痛い！とか訴えても、奴らおミソすくないから、聞いちゃいねえ状態だから。

鳥出没注意とか看板だそつかな。

でもまあ友達、なわけで。

そんなお友達のお肉、食べたくないでしょ。

皆さんだって、ついわざわざまで喋つてた友達のお肉、食べたくないでしょ？ え。違う？

これぞまさに友食いつてか？

H A H A H A

…………… 寒気が。風邪かな。

ぶるりと身を震わせて、すっからかんになつた鳥まみれのお皿を持つて家中に入る。

シッシッと鳥を払えば、

『ヒカリチャンマタクルネ』

『アリガトネ』

バツサバツサと飛んでいく奴ら。

おミソ足りないけど、

可愛い奴らだよ。うん。

チラリと時計を見れば、9時。

向ひと同じ時間の読みだからいいけど、異世界の時計は左回りに進む。

気持ち悪いのをなんとか押し込んで見る。

あ、9時だ。

9時かあ…

私、この時間は学校だったよね…。

学校、楽しかったなあ…

友達のかつちゃん、どうしてるのかなあ…

向こうに想いを馳せながら、モシャモシャとサンディッシュを頬張る
アールを見る。

?

9時
?

アールのお仕事が始まるのは、
8時50分。

月曜日のドラマは夜の9時。

二〇二〇年
今は?

9時。

ターフラワード。

さああと血の気が引く。

「…師匠…えと、今日はオシゴトないですかね…？」

ギギギ…と油の切れたロボットのよじこ首をかしげる。

師匠がお仕事に遅刻すると、夜遅くに帰つてくることになる。

そうなれば、暗闇に恐怖を感じる私にとって、師匠のお仕事遅刻は死活問題なのだ。

ですから師匠。
お願ひだから、無いと言つて

「え？何言つてんの光。いつも通りよ？」

「ダウトオオオオ！……！」

期待が碎かれた。

「師匠…モウダメです…遅いです…手遅れです…今9時です…〇」

「」

アールの顔から血の気が失せた。

「ち…遅刻じゃないので！残業！？」

ガタツと椅子を倒しながらアールがたちあがる。

「とつ…といあえず急ぎおしょー!」

慌ててアールのローブを頭に被せた。

「行つてらつしゃー!師匠!」（泣）

目からポトフを流しながら私が言えまば。

「…行つてくるわ…転移」

白い光に包まれて、げつそりとやつれたアールが消える。

今日一日、凄くテンション低く過いちゃうことになつそつです…

モウヤダワフイ。（（涙））

「はあ…」

今日の夜はガクブルで過いすんだと思つと気が重いです…。

肩を落とした私を心配するよつて黄緑色の綺麗な鳥が話しかけた。

『ダイジヨーブ、ダイジヨーブ。ソレヨリサ、モリノオクーオイシ
イキノミガアルンダケドイカナイ?』

?

やべ、一瞬理解できなかつた。

うん、まあ、この鳥が凄くフレンドリーなことは理解できた。

「…キノミ…木の実?」

『アマクテトツテモオイシイ弔』

そういえば、ジャムなくなつたんだよね…

今日ので最後だつたから…

「行く…」

ついでに沢山食べちゃおつとか下心あつあつドナギ、何か?

『ハイコウハイコウ…』

鳥よ、とつあえず羽を飛び散らすのヤメレ。

* * *

「はあ、はあ、ねえッまだなのーー?」

歩くべしと一時間程。

何この獸道。

いや、ここまで歩いた自分に拍手だよ。

『モウチコシト、モウチコシト。』

「こやこや、君。わつきかられしか言ひてなーから。」

所詮は鳥。

お//つの//知つない鳥。

されど鳥。

自分に翼がなことigaこれ程までに詭めしへ思つたことはない。

モウチコシトとこつ鳥さんの言葉を疑いながら、こや正直に言います。信じません。

足を進める。

え? 何?

転移魔術使えよつて?

のんのんのん。

甘いですよ！

私が得意とするのは

治癒魔術と防護魔術です『豊臣さん。

よつて、移動魔術なんざ私には使えませんよつて。

爆発しますから。

周り巻き込んで大規模な爆発おこしますから。

そりや そうですよ。

魔術とかナニソレ使えるとかスゴイみたいな世界からきたんですよ？

アールの必死の授業のお陰で使える方がスゴイよ。
頑張る自分、拍手だよ。

あ、アールに苦手な魔術はないよ？

治癒魔術、防護魔術、攻撃魔術、移動魔術、空間魔術：

全部偏りなくできないと王宮魔術師なんて出来ませんからアアアアア
アア！！！

鳥さん、モウチヨットとこつと葉信じてあげなくてサーセン。

嗚呼、私は今、凄く生きていることに感謝しています。

人生万歳。

木の実万歳。

鳥万歳。

「ひやつはー————！」

紅く艶やかに光るみずみずしい木の実達。

そこの中、木の実、木の実、木の実、キノ!!。

「ひやつはー————！」

狂喜乱舞して一口食べれば、
ここまで歩いた疲れとか
夜はガクブルなんだとか
もうもうが吹つ飛ぶ。

「ああん、スゴイよ！ オイシイヨー何この口に広がる甘味ー少しの酸味が素晴らしいよー黄金比だよー！」

ラズベリーのよつで
イチゴのよつで

なんかもつ言い表せない美味しさ！
好物の海老より美味しいよ！

『ゲンキデテヨカッタ！』

「ありがとね！」

おミソ足りないけど、ホントにいい奴！

ああもう、鳥フィーバーになつたつて文句言っちゃいけない……！

……いや言つけど。

ひょいひょいと木の実を摘んで、籠の中に入れる。

口の中にも入れる。

籠が一杯になつたところ、重大なことに気が付いた。

「……う……重い。」

欲張った私が悪いんですよ。

ええ。

分かつてますよ。

ドサリと籠を下ろして、キヨロキヨロと道具を探す。

チラリと木の実をつづいている鳥を見た。

「チツ、使えねえ。」

たかが鳥、だつた。

ガサガサと道具を求めて歩く。

足のしたでパキパキと小枝が小気味良い音を立てた。

『ドウシタノ、カエルノ?』

いつの間にか肩に乗った鳥がピピッと鳴く。

鳥を飼つたことのある人は分かると思います。
アレなんです。

凄くうるさいんです。

鼓膜が破れる!!!!!!

耳元で鳴くな!

鳥を肩に乗せたまま、物色していると、視界に銀色な物体が映つた。

「？」

銀色のソレはフサフサとしている。

「？毛？」

フサフサが繋がる先を辿ると…

「…お、お、狼！？」

私の三倍ぐらいの大きさのビッグサイズの狼がいた。

『ワアア、ワアア、タベラレチャウヨー』

バツサバツサと羽を撒き散らしながら危険を警戒する鳥。

あー、鳥臭い。

とりあえず、そろつと逃げよう。よし。

…？

何かがおかしい。

ビッグサイズな捕食者、巨体を横たえています。

ピクリともしません。

腹に斜めに切り傷が走っています。
大量の血。

違和感の正体は血か！
なんだ血か！

「…血？」

さああつと血の気が引く。
思わず一度見した。

「待て待て待て。アレか。死亡フラグか。」

じいっと見つめれば、浅く狼の胸が上下していることに気付いた。
え。生きてる。

『ケガシテルヨ！ケガシテルヨ！モリノセイレイサマガケガシテル
ヨ！』

バツサバツサと鳥臭い。

つて。

「モリノセイレイサマってヤバイじゃないかーー！」

道理ででつかいワケだ。

ということは、だ。

仮にも私、森に住まわせていただいている身。

ということは、だよ。

「助けなきゃー！」

得意な治癒魔術、ここで使わなくていいで使つんですかってのー！

『HH-デモヒカリちゃん、ココイヨー。』

「鳥は黙つてなさいやるつたらやるのー。」

傷口に手をかざす。

目を開じて、魔力を探つた。

ほのかに手が温かくなつた。

目を開き、傷口に沿つて手を当つれば、淡く光りながら傷口が閉じる。

かなり深い傷が閉じていいくのを見ながら、このあとさりげなくて木の実を運ぼうかな、とか、

暗いのやだな、とか考える。

傷口をふさぎ終わつて、狼の呼吸が安定したのを確認。

Wow!

自分、頑張ったよー！拍手！

でも。

「あ、力、使いすぎた…」

狼の、傷口の治つた無防備なお腹へ倒れ込む。

もふり。

嗚呼、狼の毛皮、最高、と
薄れゆく意識の中で思った。

最強だよもふもふ。正義だよもふもふ。（後輩めい）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1689ba/>

異世界フラグがたちました

2012年1月5日19時49分発行